



私たちは常にあたらしいなにかで自身を満たしながら  
さまざまな状態で存在しつづける「世界」である。  
「世界」の個別化した姿である。

状態の変化は、  
いくつもの部屋を通過していく感覚として知覚される。  
ここで「部屋」が「境地」や「モード」でも同じである。

部屋の移動は左図を原型としている。  
突入し、部屋を満たし、やがて出ていく。  
あたらしい部屋に入ることは発見であり、快楽であり、  
自己の再認識であると同時に、なにものかの死である。

トンネルを抜ける。雲間から光がさす。急に視界がひらける。  
あたらしい部屋に入る時の感覚のこれらの類型は、しかし、  
呼吸をとめる、排泄をこらえるといった幼児期の快感とも似ている。  
共通しているのは、「抑圧と解放」「境界」である。

ここに性的なものを読み取るのは誤りだろうか。

べつの描き方をしてみよう。  
すると、これは性的な隠喩のように思える。  
あるいはその逆なのか、どうか。

私の仮説はこうだ。  
世界が性的隠喩に満ちているのではなく、  
性が世界を模倣しているのだと。  
「世界」は、あるいは、あらゆる存在は  
ふたつの力を兼ね備えているのである。

そして、部屋の移動が  
くり返されていることを考えると、  
このふたつの力は交互に発現するものらしい。

